

(資料)

御花史料館の百馬及牛毛物弁定図巻(一)

小* 林 法 子

はじめに

御花史料館につたわる旧柳河藩主立花家の所蔵品に、「百馬及牛毛物弁定図巻」と題する画卷がふくまれる(以下、御花本と称す)。全二巻、九十八疋の馬と十四頭の牛をえがき、ほとんどの牛馬に漢名と和名を書きそえている。画中の留書から、原画は狩野尚信の作、これを関根雲停が模写し、林羅山と林鶯峰の撰になる序跋を、御花本では今井元堅なる人が筆写したことが知られる。現状での下巻巻頭に、立花蘭齋の題がある。

この画卷の原本は、『古画備考』の狩野尚信の項に言及する、幕臣黒沢定幸が尚信にえがかせた「驪黄物色図」とかんがえられる



图1 上卷 馬師皇圖



图2 上卷 馬1~6



图3 上卷 馬6~11

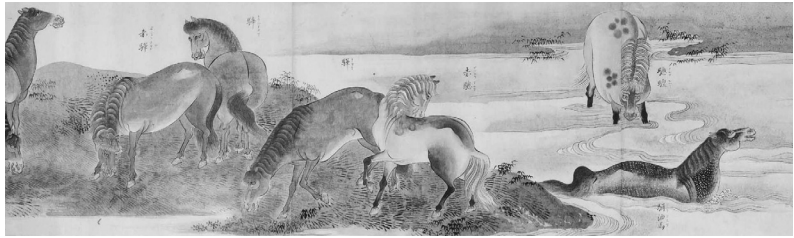


图4 上卷 馬11~17

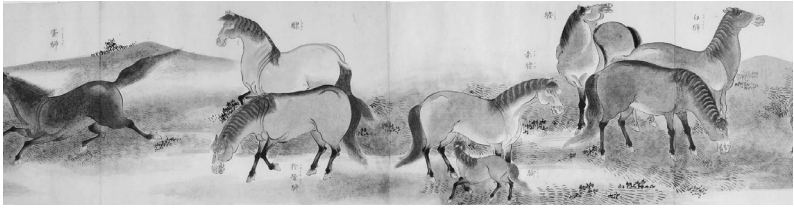


図5 上巻 馬 17~24

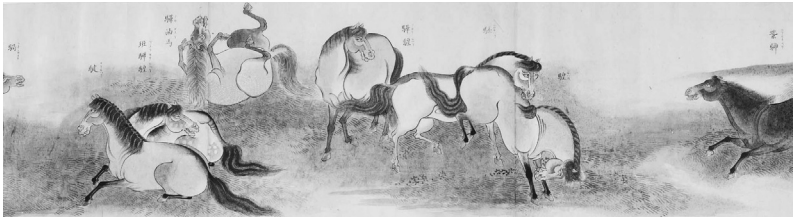


図6 上巻 馬 24~31



図7 上巻 馬 31~41

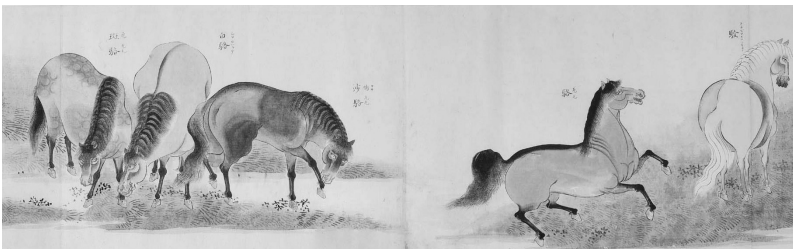


図8 上巻 馬 41~45

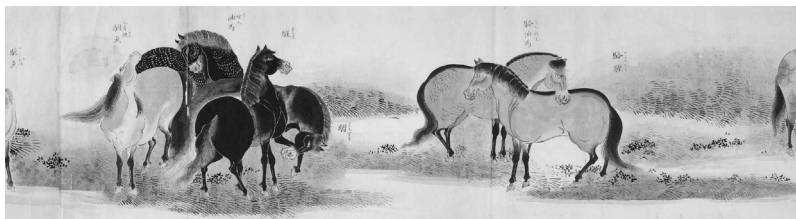


图9 上卷 馬 46~52



图10 上卷 馬 52~57、雲停留書



图11 上卷 牛 1~4

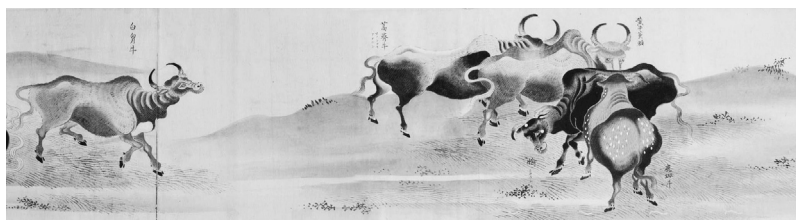


图12 上卷 牛 5~9



図13 上巻 牛10~14

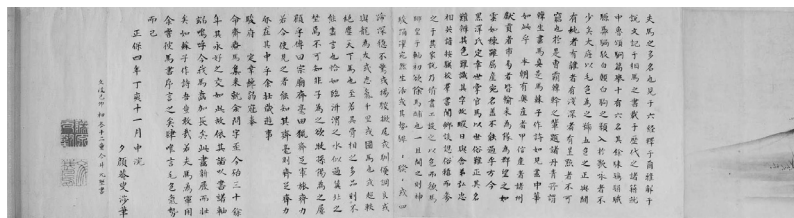


図14 上巻 跋、元堅留書

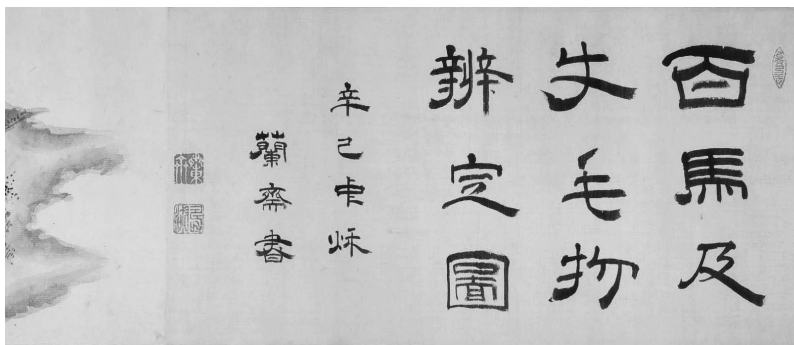


図15 下巻 題



図16 下巻 郭璞図



图 17 下卷 馬 58~62

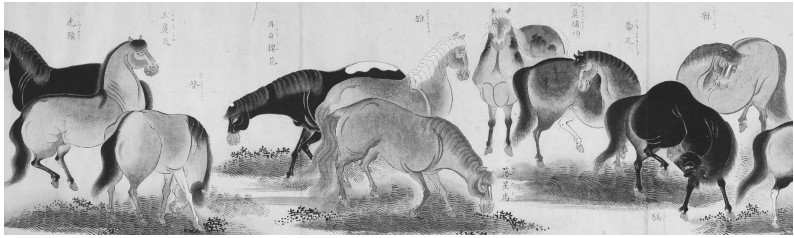


图 18 下卷 馬 62~71

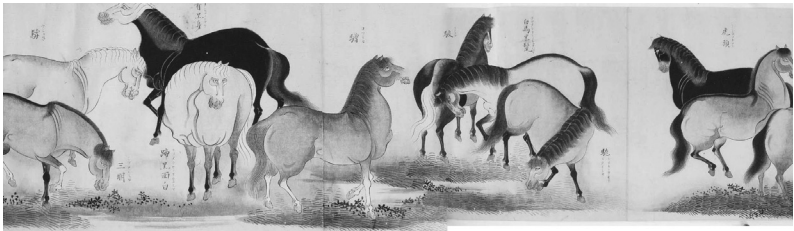


图 19 下卷 馬 70~79

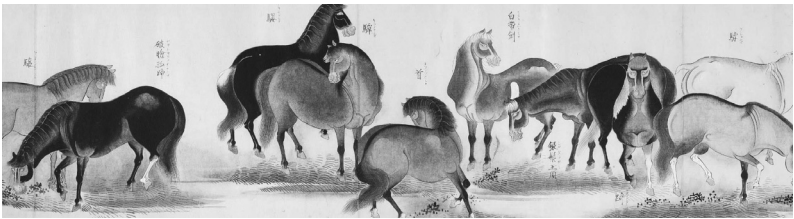


图 20 下卷 馬 78~87

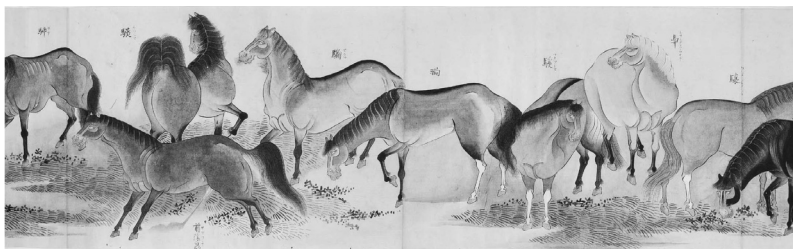


図21 下巻 馬 86~94

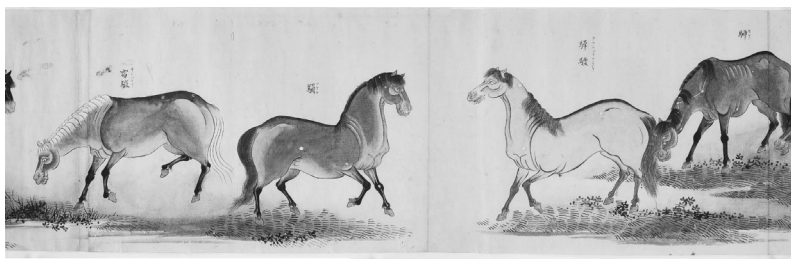


図22 下巻 馬 94~97



図23 下巻 馬 97、98

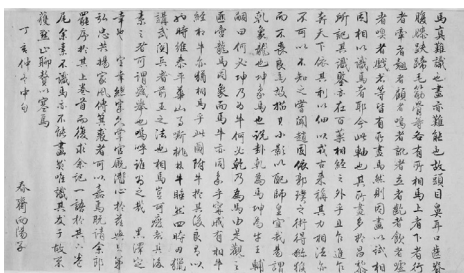


図24 下巻 跋

〔註一〕。「驪黄物色図」は、いわば、おもに毛の色によって名づけられる馬名、牛名を視覚的に確認するための図鑑である。尚信の制作した原本はみいだされていないが、「驪黄物色図」あるいは百馬図などの題名で今日につたわる模本や類例は少なくない。

本稿では、御花本を紹介し、尚信のえがいた「驪黄物色図」がどのようなものであったかを推測し、模本のなかでの御花本の位置づけを試みる。

一、御花本の現状

品質

上巻 絵 紙本著色 跋 紙本墨書

下巻 題 絹本墨書 絵 紙本著色 跋 紙本墨書

法量

上巻 天地（馬の部分ならびに跋）二七・一纏（牛の部分）二六・四纏 総長二三七・〇纏

下巻 天地 二七・〇纏 総長 七〇八・〇纏

銘文（和名のほとんどは漢名の右傍らに記すが、ここでは改行／として漢名の下方に記した。▽△は割書部分、□は難読の文字。疑問の箇所は「マ

マ」とした。また、馬名、牛名には、便宜上、それぞれに通し番号を付した。

上巻

外題（貼紙墨書）「馬ノ図 巻」

画中墨書

- 1 「駒／アヲケ」
- 2 「駟／ミツアヲ」
- 3 「騷／子スミケ」
- 4 「騷／アヲクロ」
- 5 「驄／アシケ」
- 6 「白驄／シロアシケ」
- 7 「𩇑／クロアシケ」
- 8 「黄驄／キアシケ」
- 9 「驛／レンセンアシケ」
- 10 「騷驄／アヲヒハリ」
- 11 「駟油馬／アヲカスケ」
- 12 「驄驄／アシケヒハリ」

御花史料館の百馬及牛毛物弁定図巻（一）（小林）

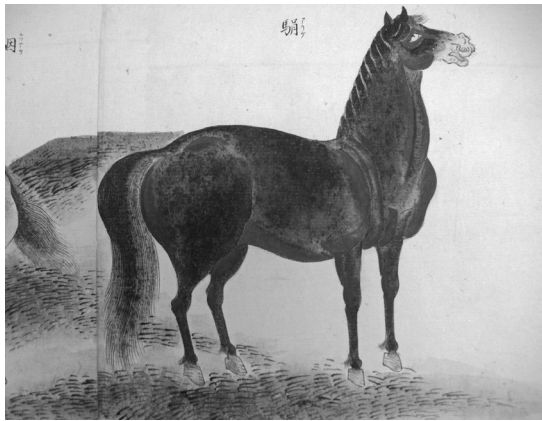


図 25 馬 1

- 13 「赤驄／ヤマトリアシケ」
- 14 「驪／アカケ」
- 15 「騂／カウシアシケ」
- 16 「赤驪／ヤマトリアカケ」
- 17 「白驪／シロアカケ」
- 18 「駟／カケ」
- 19 「騷／クロカケ」
- 20 「赤驪／アカカケ」
- 21 「驗／クリケ」
- 22 「驃／シラカケ」
- 23 「粉背駟／コナクチカケ」
- 24 「紫駟／ムラサキカケ」
- 25 「驄／ヒハリ」
- 26 「駉／シロヒハリ」
- 27 「驪驄／アカケヒハリ」
- 28 「驪油馬／アカカスケ」

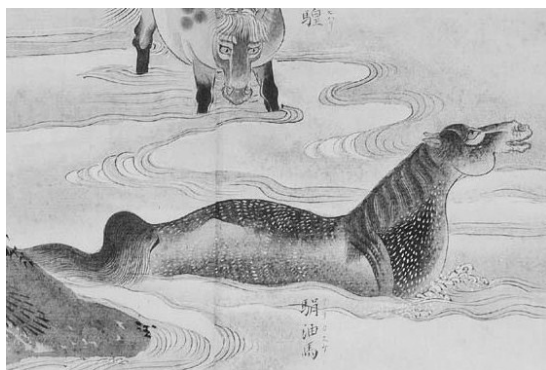


図 26 馬 11

- 29 「斑駢驄／マタラカケヒハリ」
- 30 「驤／カケヒハリ」
- 31 「駟／クチクロカケ」
- 32 「駟油馬／カケカスケ」
- 33 「黄駢／カケ」
- 34 「駟油馬／クリケカスケ」
- 35 「驢／ツキケヒハリ」
- 36 「赭黄馬／ロウハイツキケ」
- 37 「駟／ツキケ」
- 38 「宿駟／サビ月毛」
- 39 「斑駟／虎月毛」
- 40 「駟油馬／ツキケ槽毛」
- 41 「駟／クチヒロクロツキケ」
- 42 「駟／瓦毛」
- 43 「沙駟／カモ／鴨／瓦毛」
- 44 「白駟／シロカワラケ」

御花史料館の百馬及牛毛物弁定図巻(一)(小林)



図 27 馬 13

45 「斑駱／虎瓦毛」

46 「駱驢／カハラケヒバリ」

47 「駱油馬／瓦毛糟毛」

48 「驪／黒毛雲雀」

49 「驪／墨之黒」

50 「油馬／カス／糟／毛」

51 「駟魚／水青鰻／サメ」

52 「驄魚／アシケサメ」

53 「驥魚／ヒハリ鮫／サメ」

54 「白驎魚／シロアカケ鰻」

55 「駱魚／カハラケサメ」

56 「駟魚／ツキケサメ」

57 「驪／カタサメ」

留書「漢名百馬／尚信圖／雲峰門人／十三童雲停／摹寫」

画中墨書

1 「龍門牛▽ツノゝアイタ／ヒロキウシ△」

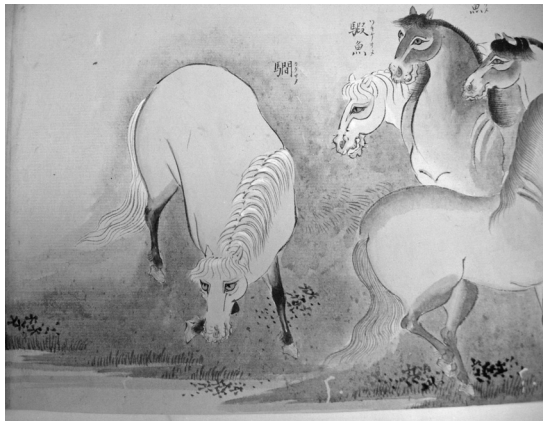


図 28 馬 57

- 2 「青牛黄額」
- 3 「赤牛黄額」
- 4 「黄幡牛／カシラトアシ／キニ^メツノ／シロキウシ」
- 5 「鹿斑牛」
- 6 「黄牛黄額」
- 7 「楡 クロウシ」
- 8 「蒿背牛／セノシロキ／アメウシ」
- 9 「白胷牛」
- 10 「喪門牛／カシラノ／シロキ／ウシ」
- 11 「惟▽シロ／ウシ△」
- 12 「孝頭牛／カミノシロキ／ウシ」
- 13 「黒牛黄額」
- 14 「牛中王▽シロウシノ／キヒタイ△」

跋「夫馬之多名也見于六經釋于爾雅解于說文記于相馬之書載于歷代之諸籍就／中魯頌駟篇舉十有六名其餘騶騶駟駟／駟鼻駟駟
 白顛白駒之類入於歌咏者不／少矣大底以毛色為之號五色之正與間／有純者有雜者有淺深者有星點者不可／窮也於是曹霸韓幹之
 輩題諸丹青所謂／韓生畫馬真是馬蘇子作詩如見畫中華／如此乎 本朝有輿產者甲信產者諸州／獻貢者市易者皆輸來為隊為群望

御花史料館の百馬及牛毛物弁定図卷（一）（小林）

一八六三



図 29 牛 14

之如／雲如練雖屈產宛名蓋不能過乎方今／黑澤氏定幸世掌官馬以世俗難正其名／難辨其色難識其字故暇日與舍弟弘忠／相共諳按驥校群書聞鄉談認俗稱而參／之于其家說乃倩畫工設之以色而貌馬／師皇子軸初欲除馬馱也一日開之則神／駿踊躍宛然生活或其勢駢々駢々或四／蹄深穩不驚或揚駿掀尾或馴優調良或／與龍為友或志氣千里或國馬也或超軼／絕塵天下馬也至若其骨相之多品則不／能盡言也恰如臨沂滑之水似過冀北之／楚焉不可知非子為之欲牧孫陽為之屢／顧乎傳曰宗廟齊毫田獵齊足軍旅齊力／若今使見之者能知其齊毫則齊足齊力／亦在其中乎余壯歲遊事／駿府 定幸纒弱冠奉／命齋療馬集來就余問字至今殆三十餘／年其永好之交如此故依其諸以書諸軸／端嗚呼今我馬齒加長矣此畫新麗而壯／矣如蘇子作詩吾豈敢哉若夫馬為軍用／余嘗彼馬書序言之矣肆唯言毛色氣勢／而已／正保四年丁亥十一月中浣／夕顏菴叟涉筆」

「文政己卯初冬十二童今井元堅書」／「藤原／元堅」(白文方印)「文／鷲」(朱文方印)

下卷

外題(貼紙墨書)「馬ノ図 一一」

題 引首印一顆

「百馬及／牛毛物／辨定圖／辛巳中秋／蘭齋書」／「蘭／齋」(白文方印)「寿／淑」(朱文方印)

画中墨書

58 「顛／ホシヒタイ」

59 「驪／ハラシロカケ」

- 60 「黄馬白喙／クチハシシロノヒハリ」
- 61 「五明／ヒタイトヨツシロ」
- 62 「縣／クチニイルサク」
- 63 「驕／マタシロクロゲ」
- 64 「鼻足／ウシロノヒタリアシ、ロ」
- 65 「流鼻續頂／ニシキナカレサク」
- 66 「落星馬／ナカレホシ」
- 67 「雉／クロクジロタテカミ」
- 68 「耳白腰花／ミ、コシシロ」
- 69 「啓／マヘノミキアシ、ロ」
- 70 「玉鼻尖／ハナサキシロ」
- 71 「虎頭／ミ、シロノクロケ」
- 72 「駘／クロケノヲモテ／ヒタイシロ」
- 73 「白馬黒鬣／クロタテカミノシラカハラケ」
- 74 「駟／ヲシロ」
- 75 「驢／ヨツシロ」

御花史料館の百馬及牛毛物弁定図卷(一)(小林)

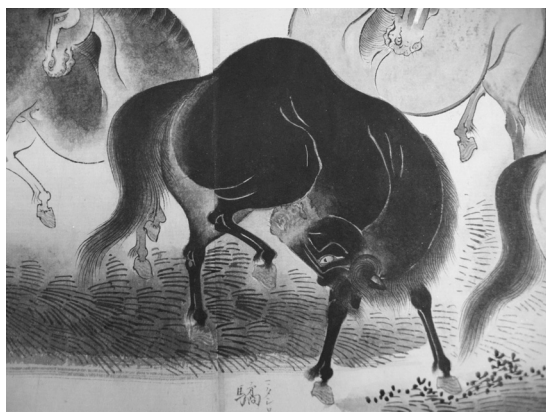


図30 馬63

- 76 「蹄黒面白／ヒツメクロノヲモテシロ」
 77 「白首黒身／カシラシロノクロケ」
 78 「騄／ウシヲムマ」
 79 「三明／ミツアシシロ」
 80 「蹄／マエノヒタリアシ」
 81 「銀鬃玉頂／シロタテカミ」
 82 「白帯剣／ヒタリヒハリ（ママ）シロ」
 83 「首／ヨツノツメシロ」
 84 「驪／リウノケシロ」
 85 「騷／ヲモトシロ」
 86 「破臉孤蹄／ナカレサクノイチシロ」
 87 「驥／ウシロミキアシ、ロ」
 88 「鼻／ヒサシタクロノツキケ」
 89 「騃／フタツシロ」
 90 「狗」
 91 「驪／セクロ」

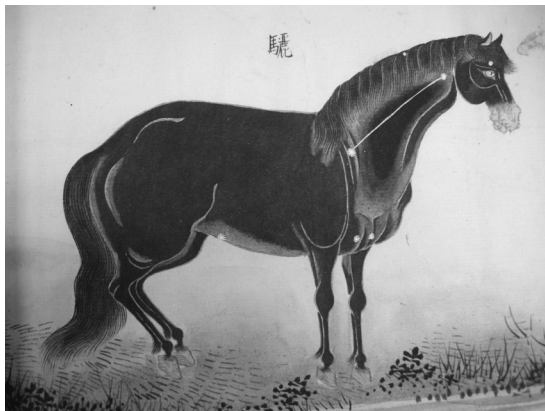


図 31 馬 98

92 「驢／ケツシロ」

93 「前陰白駁／サヤフチ」

94 「駟／カケ」

95 「驊驢／アカケツキケヒハリ」

96 「駟／アヲケ」

97 「宿駟／サヒツキケ」

98 「驪」

跋「馬真難識也畫亦難能也故頭目鼻耳口齒背／腹膝跖蹄毛筋骨等各有相_馬上者下者行／者牽者翹者鳴者訛者立者齧者飲者
嘘／者嗅者戲者等皆有所畫_馬然則因畫以試相／因相以識馬者耶今此軸也其所畫多於昌黎／所記其識鑒亦在百藥相經之外乎且乍
進乍／奔天下依其利以佃以戎古來稱其力相法亦／不可以不知之嘗聞趙固依郭璞之術得獼猴／而不喪良馬故描其小影以配師皇宜
哉易謂／乾象龍也坤象馬也說卦乾為馬坤為牛王輔／嗣曰何必坤乃為牛何必乾乃為馬由是觀之／匪啻龍馬同象而馬牛亦同象乎寧
戚有相牛／經相牛亦猶相馬乎此圖附牛於其後良有以／也時維泰平華山馬嘶桃林牛睡然四時田獵／講武閱兵者前王之法也相馬豈
可廢哉其後／素之者可謂盛舉也嗚呼誰為之哉 黑澤定／幸也 定幸繼家久掌官廩潛心於茲与_馬弟／弘忠其揚家風傳箕裘者可以
嘉焉既請余郎／罷序於其上卷首而復求余記一語於其下卷／尾余素不識馬亦不能畫然唯識其友于故不／獲默止聊贅以塞焉／丁亥
仲冬中旬 春齋向陽子」

読みくだし文（読みくだし文の註は、それぞれの文末に付した。）

上巻の跋

「夫れ馬の多名なること六経に見え、爾雅に釈き、説文に解き、相馬の書に記し、歴代の諸籍に載たり。就中、魯頌駟篇に十有六名を挙げ、その余騊、騊、駟、驥、驂、騮、驕、駮、白顛、白駒の類、歌咏に入るも少なからず。大底毛色をもってこれの号となす。五色の正と間と、純なるものあり、雑なるものあり、深淺なるものあり、星点なるものあり。窮むべからざるなり。是において曹覇、韓幹の輩、諸丹青に題す。所謂、韓生の馬を画くやまことにこれ馬なり、蘇子の詩をつくるや画を見るが如し。中華此の如きか。

本朝、奥産のもの、甲信産のものあり。諸州献貢のもの、市易のもの、皆輸（いた）し来りて隊をなし、群をなす。これを望むに雲の如く、練の如く、屈産名に宛てるといへども、蓋し過ぐることをわざるか。方今黒沢氏定幸、世々官馬を掌る。世俗、その名の正し難く、その色の弁じ難く、その字の識り難きをもって、故に暇日、舍弟弘忠と相共に按驥を誦じ、群書を校べ、郷談を聞き、俗稱を認めて、これに其家の説を参えて、乃ち画工を倩（たの）み、これに設くるに色をもってす。而して馬師皇を軸初に貌り、馬の醜を除かんと欲するなり。一旦これを開けば、則ち神駿踴躍、宛然として生活す。或いはその勢い駢々駢々とし、或いは四蹄深穩にして驚かず。或いは駿を揚げ、尾を掀げ、或いは優に馴れ良きに調ふ。或いは龍と友となり、或いは千里を志気するは、或いは国馬なり。或いは超軼絶塵するは天下の馬なり。その骨相の多品のごときに至りては、則ち言い尽くすこと能わざるなり。恰も汗涓の水に臨むが如く、冀北の埜を過ぎるに似たり。非子のこれがために牧せんと欲し、孫陽のこれがために屢々顧みるを知るべからざるか。伝に曰く宗廟毫を齊え、田獵足を齊え、軍旅力を齊うと。もし今これを見るものをしてよ

- ・馬師皇 黃帝のとき馬医、龍もかれの治療を乞うた（『列仙伝・神仙伝』平凡社ライブラリー一九一九五年）。
- ・醜 人に災害をあたえる神

・非子は造父の教えをうけ、馬を好んでよく育てた。周の孝王がかれを召して汧渭（陝西省の汧水と渭水）の間で馬のことをつかさどらせたところ大いに繁殖した（『史記』卷五 續修四庫全書史部正史類）、なお汧渭の間の牧馬のさまは、たとえば蘇東坡「画韓幹牧馬図」に「南山之下汧渭之間 想見開元天寶年 八坊分屯隘秦川 四十万騎如雲煙 騅駟駟駟駟駟駟 白魚赤兎驛皇韓（略）」（『蘇東坡全集』前集卷第八）。

・孫陽 伯樂、春秋時代の秦の穆公のときのひと、相馬をよくす。韓退之「送温造処士赴河陽軍參謀序」に「伯樂一過冀北之野而馬群遂空夫冀北馬多於天下伯樂雖善知馬安能空其群邪解之者曰吾所謂空非無馬也伯樂知馬遇其良輒取之群無留良焉苟無留良雖無馬不為虚語矣（略）」（『新刊経進詳註昌黎先生文集』卷二一 續修四庫全書集部別種類）。

- ・宗廟 国家
- ・「故にその〈諸〉に依りて」は、『羅山全集』の「驪黄物色図序」では「故にその〈請〉に依りて」
- ・かの馬書 黒沢定幸編『相驥鑑』

下巻の跋

「馬は真に識り難きなり。画もまた能くし難きなり。故に頭、目、鼻、耳、口、齒、背、腹、膝、蹄、毛筋、骨等、おのこの馬を相る所あり。上なる者、下なる者、行く者、牽く者、翹（つまだて）る者、顧みる者、鳴く者、訛（うご）く者、立てる

者、乾む者、飲む者、嘘（ふ）く者、嗅ぐ者、戯れる者等、皆画く所あり。然らば則ち画に因りてもって相るを試み、相るに因りてもって馬を識るものか。今この軸たるや、その画く所、画は昌黎が記す所に多く、その識鑿もまた百葉相経の外に在るか。且つは乍ち進み、乍ち奔る。天下その利に依り、佃をもつて、戒をもつて、古来その力を称す。相法もまたもつてこれを知らざるべからず。嘗て趙固が郭璞の術に依りて彌猴を得て、良馬を喪わざるを聞く。故にその小影を描き、もつて師皇に配す。宜しき哉。易に謂う乾の象は龍なり、坤の象は馬なりと。説卦は乾を馬となし、坤を牛となす。王輔嗣曰く、何ぞ必ずしも坤を牛となし、何ぞ必ずしも乾を馬となさんや。是に由りて之を觀れば、ただ龍馬のみ象の同じに匪ずして、馬牛もまた象の同じならんか。甯戚相牛経あり。牛を相ることまたなお馬を相るがごとし。此の図、牛をその後に付す。良（まこと）にもつて有るなり。時維れ泰平、華山に馬嘶き、桃林に牛睡然して、四時田獵、武を講じ、兵を閱するは、前王之法なり。馬を見ること、豈癡すべき哉。その後素の者、盛擧と謂うべきなり。嗚呼誰かこれを為す哉。黒沢定幸なり。定幸家を継ぎ、久しく官廐を掌り、心を茲に潜め、その弟弘忠と共に、家風を揚げ、箕裘を伝えるは、もつて嘉すべし。既に余の郎罷、序をその上卷の首に請けて、また余にその下卷の尾に一語を記さんことを求む。余、素より馬を識らず。また画くあたわず。然れども唯その友手を識る。故に黙止することを獲ず、聊か贅りてもつて塞ぐ。丁亥仲冬中旬 春齋向陽子」

・下卷の跋は、『鷲峰林学士文集』卷之九十三「馬図跋 黒沢木工助求之」〔近世儒家文集集成〕第十二卷 べりかん社 一九七七年）とほぼ同文。

・昌黎 韓愈（退之、中唐の文人）の封号

御花史料館の百馬及牛毛物弁定図卷（一）（小林）

一八七一

- ・郭璞の趙固の馬をよみがえらせた話は、『探神記』巻二の六二（東洋文庫一〇一九九五年）。
 - ・王輔嗣は三国時代の魏の山陽のひとつ、著に易および老子の注がある。
 - ・甯戚は春秋時代、衛のひとつ。齊の桓公、甯戚の、牛の角を叩いて商歌を歌うを聞き、異として彼を任用（『呂氏春秋』巻十
- 九 欽定四庫全書子部）。

・『周書』「武成」に「樂記曰武王勝商渡河而西馬散之華山之陽弗復乘牛放之桃林之野而弗復服車甲蚌而藏之府庫倒載干戈包以虎皮天下知武王之不復用兵也」（景印文淵閣四庫全書 經部五七）。

- ・郎罷 父親
- ・友于 兄弟

図様と構成

上巻ははじめに馬師皇による龍の治療の逸話をえがく（図1）。波うちよせる岩にとりすがる龍、馬師皇は左手でその龍の片方の鬚をつかみ、右手に鍼をもち、治療にとりかかるとするところである。童子がひとり、馬師皇の右脇から、龍のようすを不安げにのぞきみている。

この馬師皇図につづいて、野辺や水辺、水流のなかに遊ぶ馬たち五十七足をえがく（図2～10）。馬は均整のとれた堂々たる体軀をもつ。頭をもちあげまっすぐにたつもの（図25）、草をはむもの（図28）、水を飲むもの、泳ぐもの（図26）、後脚でたちあがるもの、後脚を蹴りあげるもの、駆けるもの、仰向きに転がるもの、うづくまるもの、よりそって佇むものたち、一組の母子らし

きすがたもえがかれる。馬たちの図の末尾に関根雲停の留書(図10)がある。この留書のとくに、紙質は同じながらわずかに天地のみじかい料紙に、十四頭の牛をえがく(図11~13)。牛たちはやや細い頸部、起伏ある筋肉からなる体部をもつ。馬ほどには変化はみられないが、歩み、佇み、うづくまるなど、さまざまな姿態にえがかれている。角は、左右で円をえがくように上のびたもの、やや下向きに左右にひろがるものがあるが、どちらも兜の前立のように大きくえがかれている(図29)。牛たちの図のあとに、別紙に記された林羅山の文、これと料紙は別にするが、今井元堅の落款がある(図14)。

下巻は、巻頭に立花蘭斎の隸書による題があり、ついで郭璞の図がある(図15、16)。林鷲峰の跋にもあるように、『探神記』所収の、郭璞が猿のような動物をつかって趙固の馬をいきかえらせた話に取材する。瀧のある山中で、崖からのびた枝先にいる猿らしき動物を捕獲しようと、男が竹竿をさしだしている。このようすを見守るかのように、郭璞は対岸に佇む。かれの背後には角の生えた異形のもが旗をもつてよりそっている。この郭璞と侍者のすがたは、からだの向きはことなるが、『有象列仙全伝』掲載の図に類似する(註二)。この郭璞の図につづいて、四十一疋の馬をえがく(図17~23)。上巻同様、それぞれ毛色のことなることはいうまでもなく、頭の向きや四脚のさまなどを違えて、多様な姿態にえがいている。下巻では激しい動きの馬をえがかないためか、上巻にくらべると馬たちはいっそう互いに接し、かさなりあうように、比較的密に配置される。また、下巻末の五疋のからだにはところどころに旋毛をえがきこみ、そのうち二疋では旋毛を白線でむすんでいる(図31)。これら五疋のうち四疋は、姿態はことなるものの、馬名は既出の馬名と重複する。これは、後述するように、この画卷の原本の成立事情を反映したものである。そして最後に、林鷲峰の跋がある(図24)。

御花本の現状は、下巻の巻頭に題があるなど不自然な構成である。また画中墨書が判読できないほどに料紙のかさなる箇所もある。御花史料館の百馬及牛毛物弁定図巻(一)(小林)

り、比較的無造作な修理がおこなわれたと推察される。『羅山文集』所収「驪黄物色図序」と御花本の上巻末尾の羅山の跋とが同文であること、鶯峰の跋に、上巻の巻首に父の序がもとめられたと記すことから、羅山の文は上巻巻頭にあるべきである。また鶯峰の跋は、馬師皇図に対応して郭璞図をおいた、馬のあとに牛をつけたとすることから、御花本の原状はつきのように推察される。上巻は、立花蘭齋の題、林羅山の序、今井元堅の書写銘、馬師皇図、駒から駒まで五十七疋の馬の図、関根雲停の留書。下巻は郭璞図、そして顛にはじまり驪におわる四十一疋の馬の図、十四頭の牛の図、林鶯峰の跋。

なお、ここに想定した御花本の原状から、関根雲停の留書と今井元堅の書写銘をのぞいた部分と同一構成の画巻として東北大学狩野文庫の「驪黄物色図」（以下、狩野文庫本と称す）がある（註三）。奥書によると尚信の孫如川周信による模本を再度うつしたものである。狩野文庫本は、和名をすべて片仮名表記とするが、記されている和名そのものや、和名の欠落部分も御花本と同一とみられる。

表現

上巻、下巻ともに、彩色は全体に淡い。濃い賦彩は、上巻の馬師皇によりそう侍童の衣の朱、下巻では郭璞のもつ弘子の柄に朱、郭璞の衣装の一部と灌木の葉に緑青をみるのみである。牛馬は概ね淡墨で輪郭をえがき、彩色して、描きおこすが、濃墨の部分では彫塗りとする。馬や牛をかたどる描線は打ちこみも肥瘦もおさえた比較的均一な線をもちいるが、馬師皇図と郭璞図の衣文線や岩の輪郭線などに打ちこみや屈曲の多い線をもちいる箇所もある。馬の鬣や尾の毛描きもほとんどの場合はなめらかな細線を引くが、なかに細かい波状の線として変化をもたせた箇所もある。馬の体部に毛描きはおこなわないが、槽毛をあらわす白い毛の混生

などは、点描というにはやや長い線をかきいれている。これに対して牛の体部には、ほぼ全面に毛描きをほどこす。牛の毛描きの線は直線的で、輪郭にもちいる線よりは細く、剛毛であることをあらわすにふさわしい。

個々にことなる多様な毛色はきわめて巧みにえがきわけられている。ほとんどの場合、同系統の色あるいは異なる系統の色であれ、それらをうすく、数回ぬりかさねており、さらにそのうえに点描による彩色をくわえるものもある。たとえば上巻最初の馬、駒(馬1、図25)のからだはきわめてうすい淡墨をぬったうえから、やや濃い淡墨を、馬のからだの起伏にあわせて暈かしながらぬり、尾をふくむほば全身に淡墨の点をほどこし、眼の周辺や肩、胸、腹部に濃い灰色を带状にぬっている。また巻頭より五疋目の驄(馬5、図2)は、淡い黄色を全身にぬり、眼骨の下方、鼻梁、平頸の中央と元頸付近、背梁付近に淡墨を暈かし、この淡墨をほどこさない頸や肩の輪郭線沿いには白色をぬる。そして、淡墨を暈かしぬりした部分を中心に小さな不定形の墨点を、疎密に変化をもたせつつ散らしている。このほか、円形にぬりのこしたり(馬9、図3)、たらし込みのような滲みによって斑文をあらわすもの(馬13、図27)、淡朱の隈をほどこす場合もある(馬57、図28)。いずれも複数の色をぬりかさね、ときに点描の色をくわえることによって、馬はそれぞれの微妙な毛色を獲得している。

牛の場合、濃淡の墨や褐色を、暈かしをいかしつつかさねてぬり、黒い牛では彫塗りにするなど、基本的には馬と共通する表現である。大きくことなるのは、さきにふれたようにいずれもほば全身に細い毛描きをほどこす点である。また、狩野派の禽獸図においてしばしばみいだされる点線による輪郭線が、馬ではみられないが、牛では白色、淡墨色、淡褐色の部分の一部にもちいられている。

馬の目の多くは、ごく淡い群青をぬり、中央に墨点をおき、目尻と目元と上脛側のなかばに朱をさすが、牛の目には朱をいれな

い。馬の鼻孔、口中に朱をぬるが、牛では鼻孔は墨、口に小さく朱をいれる箇所もある。馬の蹄は淡墨線で輪郭をつくるが、牛の蹄は濃墨の没骨描である。

牛馬のいる野辺は、淡墨や黒味の強い緑青をうすくまだらにぬり、ところどころには褐色や淡朱を帯状にひいている。そのうえに、幾分濃淡の変化はあるもののやや濃い黒味の緑青で短い線、点描、小さな笹の葉形などをえがいて草とする。緑青の土坡の濃淡と緑青線の草の疎密が、簡略ながら野辺の起伏をあらわしている。水辺の土坡は淡墨の没骨描であり、皴はあらわさずに、濃淡の色調によってわずかに高低の変化をあらわしている。上巻の、水に遊ぶ馬たちの部分(図224)では、この淡墨の土坡にさらに淡墨の点描がくわえられることによって具体的な背景が出現し、馬たちの遊ぶ水流が山間の溪流であるかのようにもおもわせる。とはいえ水流はおだやかで、部分的にぬられた淡い群青のうえにひかれた淡墨の細線と白色の細線の水波もおよそはゆるやかな曲線をなし、跳ねる馬の脚もとあたりに円弧の泡をつくるにとどまる。また、駟(馬37、図7)や馴(馬57、図10)の周辺にも淡墨を外隈風にぬるが、ここでは具体的な場所を連想させることはなく、淡い毛色の馬のすがたをうきたたせている。

二、御花本の制作

制作に関与した人々

御花本の題を記した立花蘭齋(一八〇一〜一八三二)は、柳河藩第八代藩主鑑寿の長子として江戸に誕生、三十一歳で柳川に歿した(註四)。江戸にそだった蘭齋は、儒学を田安藩儒で昌平黌教授もつとめた黒沢雪堂に、書を土浦藩儒であり書家として高名な

関克明にまなんだ。また柳河藩士で、江戸留守居をつとめた西原梭江（一七六一〜一八四四）の薫陶をうけた。西原家は梭江の曾祖父の代から江戸詰の家柄で、梭江は幼い頃より江戸に住まい、寛政年間頃から、谷文晁の弟東隄や手柄岡持こと平沢常富、滝沢馬琴などとの親交が顕著となっている。梭江は書画什物を観賞する耽奇会や奇談を収集披露する兔園会の同人であり、また馬を好む癖もあったという。

文政三年（一八二〇）蘭齋の義兄鑑賢が藩主となり、蘭齋そのひとは翌四年（一八二二）柳川へ帰国した。御花本の題は辛巳、すなわちこの文政四年（一八二二）に書かれた。柳川帰国後の、たとえば文政五年（一八二二）八月の「中秋賞月」一卷や、九月の「詩会御巻物」一卷（註五）などにみられる蘭齋と藩士たちの雅の交わりや、耽奇会の記録『耽奇漫録』にならった『蘭齋閑娛』や、『大平談話』、『永夜物語』などの著作は、蘭齋の教養と好古趣味や考証への強い関心をものがたっている。

画をうつした関根雲停（一八〇四〜一八七七）について、その伝記や作品を紹介する文献はきわめて少なく（註六）、とりわけ弱年のことは知られない。これらの文献によれば、雲停は江戸のひとで、大岡雲峰（一七六五〜一八四八）にまなび、細密な動植物画に長じ、今日東京国立博物館に保管される「博物館図譜」のなかには雲停画千百点以上がふくまれる。その画風ゆえに、博物愛好の大名や旗本が結成した楮鞭会の同人、たとえば前田利保や馬場大助などから多くの制作の依頼をうけた。佐々木利和氏によると、雲停の仕事の初見は文政十年（一八二七）刊『草木奇品家雅見』であり、雲峰や谷文晁とともに挿図をえがき、その数は百六十九図のうち四十五図をかぞえる。この文政十年に雲停は二十四歳、御花本の模写はこれよりはるかにはやく十三歳、文化十三年（一八一六）のことであった。御花本によって、すでに文化十三年には雲峰の門人であり、雲停を名乗っていたと確認することができる。さらには、若くしての技術の高さとともに、対象を目の前に置いて納得できるまで何度も描きあらためたという後年の制作

態度の萌芽をみとめることもできる。

関根雲停と柳河藩立花家との直接の縁を確認することはできないが、師雲峰を介して両者はむすばれる。雲峰は、『寛政重修諸家譜』によると（註七）、立花左近将監家臣牛田長次郎忠光の男で、旗本大岡家の養子となり、表右筆、奥右筆見習をつとめた。立花左近将監は蘭斎の父鑑寿であろう。『寛政重修諸家譜』では、大岡家初代助久の妻も立花家家臣の女とあり、立花家と大岡家はふかい縁があったらしい。また、柳河藩儒牧園茅山は、雲峰はじめ池田冠山、岡本花亭、大窪詩仏等と同齡のゆえをもって同唐会をもうけて会合していたとつたわり（註八）、大岡家にはいったのちの雲峰と立花家家臣たちの交流も密であったとかがえられる。御花史料館には、雲峰の作品として市河米庵著賛の菊図、四幅対の近江八景図、夜宴幽賞図もつたわる（註九）。

雲峰は谷文晁の弟子とも（註一〇）、鈴木芙蓉の高弟ともされる（註一一）。文晁は芙蓉にもまなんでいるから（註一二）、雲峰と文晁は、師弟とも同門ともかんがえられる。その文晁は、御花本成立よりはおくれるが、文政七年（一八二四）五月の耽奇会発会時、西原梭江とともに同人として名をつらねている（註一三）。さらに、文晁は浅草田圃の柳河藩上屋敷をおとずれ、銭舜挙の美人図など二十三幅を拝見したこともあり（註一四）、文晁の娘は下谷の柳河藩上屋敷につかえていたという伝承もあり（註一五）、立花家との縁も浅くはない。今日御花史料館には文晁の絵画四件があり、昭和七年（一九三二）の御道具帳は、文晁をふくむ諸家による卷子「鑑賢公四十才年賀」と「閑中清賞寄合書」のあったことをつたえている（註一六）。

跋を書いた今井元堅についてはまったく知られない。御花本から、藤原氏を称し、号は文鷲、文政二年（一八一九）に十二歳とわかるにすぎない。想像を逞しくするなら、元堅は関克明あるいはその息思亮の周辺のひとつではなからうか。克明は、さきにもふれたように立花蘭斎の師であり、隠居した梭江へ滝沢馬琴賛鈴木有年画の西原梭江騎牛図賛を贈ったひとであり、御花史料館の牧

場簡沢図の題や、青山忠俊像と酒井忠世像の賛としてかれの書をみいだすこともできる(註一七)。また、思亮は、西原椋江の娘婿であり、耽奇会同人でもあった(註一八)。立花家と、雲峰や文晁を介しての雲停、西原椋江と、克明や思亮を介しての元堅という想像は、図式的過ぎようか。

制作の事情

御花本の制作の意図や経緯をたしかめる手がかりはない。御花本にのこる年紀をたどると、まず文化十三年(一八一六)雲停が画をうつし、文政二年(一八一九)に元堅が序跋をうつし、文政四年(一八二二)に蘭齋が題を記した。御花本におけるもつともはやい年紀、文化十三年(一八一六)に蘭齋は十六歳、雲停十三歳、元堅は九歳である。これらの年齢から、かれらによる御花本全体の制作が文化十三年頃に計画されたとも、蘭齋がそれを計画したともかんがえがたい。いずれの時点であれ、もしも特定の人物の発案とするなら、好事のひとつ西原椋江がふさわしい。

また、さきにふれた御花本と同一構成の狩野文庫本は、狩野如川周信の模本を、文化十四年(一八一七)五月に、藤輝崇なるひとの命によって三浦義信がふたたびうつしたものである。御花本とはほぼ同時期にうつされた狩野文庫本制作の経緯は、御花本制作の事情をあきらかにする手がかりをふくむとおもわれるが、これまでのところ、これに関与した人々について知るところはない。しかしながら、雲停の師大岡雲峰、雲峰や椋江と深い関わりがあった谷文晁、あるいは鈴木芙蓉、かれらの知友平沢旭山、屋代弘賢の事跡から、雲停が尚信の末裔木挽町狩野家に伝来した模本かその写しに接した可能性や、御花本成立の気運を推察することはできる。

谷文晁は、文政四年（一八二二）老中水野忠成へ提出した書に「狩野如川周信門弟加藤文麗門弟」と記し（註一九）、みずから木挽町狩野家につらなることを表明している。木挽町狩野家に、すくなくとも文化年間までは如川周信による模本のつたわっていたことは、さきの狩野文庫本の奥書からあきらかである。そして、文晁が好事好古のひとつであり、過眼の諸画の写しをつくったこともよく知られている。

また、鈴木芙蓉は、おそらく天明年間の終わり頃、林大学頭信敬のもとへもたらされた「驪黄物色図」を模写した。そして偶々、平沢旭山はこの芙蓉模「驪黄物色図」をみる機会をえた。芙蓉がうつした「驪黄物色図」は馬數十、褪色もある不完全なものであったらしいが、これに触発されて、旭山は寛政元年（一七八九）馬書『華陽皮相』を刊行するにいたる（註二〇）。画は芙蓉が六十三図をえがいている。脱稿ののち旭山はその謄写を屋代弘賢に依頼した。その折、旭山は弘賢から「驪黄物色図説」の存在を知らされ、これを借りて照合し、『華陽皮相』附録の首に和名のいくつかを加筆している。弘賢による謄写は、寛政元年（一七八九）二月下旬から六月までつづき、六月晦日には落丁にも気付いている（註二一）。そして七月十八日、弘賢は、はじめて木挽町狩野家の栄川院父子を訪問、閏七月朔日にも狩野邸を訪れている。栄川院典信父子を前にして、弘賢が尚信の「驪黄物色図」を話題としないことがあるだろうか。まさにこの寛政初年に、百科事典ともいえるべき古今要覧の編纂をおもいたった弘賢が（註二二）、狩野家伝来本の模写を乞うことはなかっただろうか。弘賢が芙蓉にその模写を依頼することはなかっただろうか。時経て文化七年（一八一〇）、古今要覧は幕府の事業として本格的にその編纂が開始され、文政年中の献上は年に三十冊、五十冊にもものぼっている。今日につたわる「古今要覧稿」禽獣部の馬の項は和名による馬の毛色三十八種をとりあげ、本文では「驪黄物色図説」からの引用も多く、「驪黄物色図説」所載として三十三点の馬図を載せている（註二三）。そのようななか、文政七年（一八二四）五月、梭江は文晁等と第

一回耽奇会をひらき、六月の第二回から弘賢もこれに参加している。

御花本は、このような寛政から文化文政年間頃の、雲停や梭江の周辺にみとめられる博物、考証愛好の高揚のなかに生まれたのである。

註一 『増訂古画備考』三十八主馬尚信の項（朝岡興禎著、太田謹増訂 思文閣 一九七〇年復刻）に引用する南畝筆記の浅草観

音堂絵馬考、出典は大田南畝の武江披砂卷五所収浅草観音堂絵馬考（『大田南畝全集』第十七卷 岩波書店 一九八八年）。

註二 『有象列仙全伝』（王世貞輯次、汪雲鵬校梓 須原屋茂兵衛他発行 一六五〇年）は福岡大学所蔵本を参照。

註三 東北大学附属図書館狩野文庫画像データベース参照。

註四 立花蘭齋ならびに西原梭江のことは、中山右尚「梭江・馬琴逸事」（九州女子大学紀要第九卷第一号 一九七三年）、同「西

原梭江小伝」（近世文芸二四 一九七五年）、同「立花蘭齋」（『西国大名の文事』葦書房有限公司 一九九五年）、『新柳川明証図

会』（柳川市 二〇〇三年）などを参照。梭江は、馬を好む癖ありと『兎園小説』第三集の高松邸中厩失火の事（日本随筆大成第

二期一 一九七三年）に述懐する。

註五 『旧柳河藩主立花家伝来美術工芸品調査報告書』柳川市教育委員会 二〇〇六年

註六 田中芳男「雲停翁小伝」（博物雑誌一 一八七八年記）、小林忠「関根雲停」（アニメ一七〇 平凡社 一九八七年）、佐々木

和「異才関根雲停の動物画」（『江戸の動物物図』朝日新聞社 一九八八年）、磯野直秀「東京国立博物館蔵『博物館図譜』に

御花史料館の百馬及牛毛物弁定図巻（一）（小林）

一八八一

ついで」(慶應義塾大学日吉紀要自然科学一二 一九九二年)

註七 『新訂寛政重修諸家譜』卷第千三百二十(統群書類従完成会 一九六四年) 大岡の項

註八 『旧柳川藩志』下 第十二節柳川偉人小伝(一) 牧園茅山の項(福岡県柳川・山門・三池教育会 一九五七年)

註九 註五の報告書、『柳川の美術』Ⅱ柳河藩主家時代の美術の項(柳川文化資料集成第三集―一 柳川市 二〇〇七年)

註一〇 「谷氏系図及び門人姓名(野村文紹手録)」「写山楼谷文晁」栃木県立美術館 一九七九年)の門人姓名に「大岡雲峯」

註一一 『増訂古画備考』三十大岡雲峯の項に「芙蓉の高弟」

註一二 「雲室随筆抄」(『日本絵画論体系』第三卷 名著普及会 一九八〇年) 文晁の項に「初加藤伊豫守の画を学び、のち玄対、

芙蓉、北山権之助所々へ参り」、また『増訂古画備考』二十九鈴木芙蓉の項に「(略)南畝、芙蓉、雲峯等ト来タリシガ、芙蓉酔ウテ文晁ノ嗜ヲイタシ、予ガ門人ナル由ヲ語り、世人専ラ其画ヲ賞シテ、予ガ画ヲ不知事ヲ言リ」。

なお、文晁、雲峯、芙蓉等に関しては、武田庸二郎「斎田雲堊の博物図譜と彼の生きた時代」、鈴木泉「埋もれた江戸の画人たち―大岡雲峯と坂本浩雪―」(ともに『江戸の博物図譜―世田谷の本草画家斎田雲堊の世界―』世田谷郷土資料館 一九九六年)にくわしい。

註一三 小出昌洋「耽奇漫録解題」(『耽奇漫録』吉川弘文館 一九九三年)

註一四 「過眼録」寛政九年閏七月二十八日(谷文晁の研究)『森銃三著作集』三 中央公論社 一九八八年)

註一五 註八の文献 第十八章人物第五節画家列伝谷文晁の項

註一六 註五の報告書、『柳川の美術』Ⅱ 柳河藩主家時代の美術の項、御花史料館蔵「昭和七年六月柳川立花家御什器目録 文

第貳卷

註一七 西原棧江騎牛図賛のことは、『馬琴日記』天保四年四月二十八日、五月七日、九日、十日の条（中央公論社 一九七三年）。

この作品の制作は、柳川帰国後の棧江が克明へ、牛に乗って近郊を逍遙したいとおもってようやく手に入れた牛が暴牛のために乗ることができず返却したとつたことから、克明が発案した。賛文は克明の書。また、克明の作品は、註五の報告書、『柳川の美術』Ⅱ 柳河藩主家時代の美術の項を参照。

註一八 註一三の解題を参照。

註一九 河野元昭『谷文晁』日本の美術二五七 至文堂 一九八七年

註二〇 国立国会図書館所蔵本を参照、制作の経緯は自序に詳しい。

註二一 『華陽皮相』（註二〇）附録の序、「己酉」中の日記（「屋代弘賢」『森銚三著作集』七 一九八九年）

註二二 古今要覧編纂の経緯などは森銚三「屋代弘賢」を参照。

註二三 「古今要覧稿」は国立国会図書館所蔵本を参照。これに「驪黄物色図説」所載として載せる馬の図のほとんどは御花本とも一致するが、同名で形姿の異なる馬図も二点（紫駟、黄駟）ふくまれる。蔵書六万巻ともいわれる弘賢のもとには複数の写本があったと想像される。